

リーディングDXスクール事業【実践事例】

新潟市立白新中学校

【取組内容⑤】

難聴特別支援学級生徒の情報保障におけるICTの活用

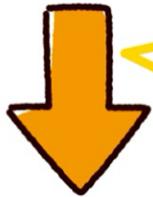
BEFORE

【生徒】

難聴生徒への情報提供が以下の場面で困難であり、自分の考えを他者と交流しづらい。

- マイクを通した音声聞き取りづらく、体育館での全校朝会で話した内容が聞き取りにくい。
- 授業中、班での話し合いが聞き取りにくい。

姿の変容



AFTER

【生徒】

スクリーンやiPad、話している口元からの情報をもとに、話している内容を把握しやすくなる。それによって、他者との意見交流をスムーズに行い、自分の考えを広げたり、深めたりすることができるようになった。

①音声の可視化

iPadの画面にマイクを通した音声文字化されるようにする。



②スライドを使用した視覚的な情報提示

体育館での全校集会や授業の場面において、音声の説明のみではなく、話す内容や指示、発問もスライドに記載する。



③生徒がiPadを活用し、自分の考えを他者に伝えるようにする工夫

全ての生徒に、話し合いの際に、自分の意見を他者に伝わりやすくする工夫を意識づける。自分の考えを音声だけではなく、図や文字でも表現させることの価値を共有し、工夫を促していく。



成果

* () 内は手立てとの関わり

- ・難聴生徒は、話された内容を後から見返せるようになった。(①)
- ・すべての生徒にとって、体育館での話された内容や授業で話された内容を把握しやすくなった。(②)
- ・活動に関する情報が伝わることで、生徒は目的ややるべきことを明確にし、活動に取り組めるようになった。(①②)
- ・生徒が自分の考えを他者に工夫しながら伝える姿が見られた。(③)

課題

- ・難聴生徒が他者と話し合う時、iPadを音声の文字化に使用すると、その端末がそれ以外の用途に使用できなくなる。(①)
- ・学級内での複数人が話す状況の音声の精度が低い。(①)

方策

- ・授業の場面で、話し合いのさせ方を工夫する。生徒一人一人が自分のiPadを活用するのではなく、共有クラウド上に自分の発表スライドを載せ、代表者のiPad 1台をモニターにしながら話し合いが進められるよう組織する。(①②)
- ・iPadにマイクを接続し、発言する人はマイクを通して発言できるようにする。そのためには、周りからの理解が必要であるため、難聴生徒が自分の障がいを受容し、自己開示しながら他者への協力を求めることができるよう支援していく。(①)